

# 幼 兒 の 教 育

昭 和 十 四 年 十 一 月



この子は生活畫家である。いつも、日常の生活經驗を、そのまゝ立派な繪にする。その豊富な自由畫帖の中から拾つた此の繪の裏には、ユービシラ イレテ カヘルトコロ と、口繪の線とは似つかはぬ、あぶなつかしい筆つきで書いてあつた。

郵便はおとなの世界である。おかあさんに頼まれて、一枚の葉書を、自分の背ほどのポストに投函して歸る今の氣持は、まさに、おとなの世界に一役を演じたる、大得意、大滿悦である。

—— いまし、意氣揚々として、タバコ屋の前を、おとなの町を、潮歩して歸る足つき、手のふりかた、聳えた肩、つんとした頭、そして、わき目もふらずに正面をきつてゆく横顔が、なんとよくその心持を浮き上がらせてゐることか。

—— これは、どんな巧みな文章でも、斯うはあらはし得ない子ども心理である。あらはせないのではない。常人しか知らない子どもの心である。

幼兒の生活畫は、客觀描寫でないところに、眞が迫る。

(倉橋生)